

さらさらとした粉雪、灰が降ってくるかのようなヒラヒラとした灰雪、綿のようにかたまってまるで牡丹の花のような牡丹雪、同じ雪でもさまざまな雪があります。

また、雪には別の言い方があり、有名なところでは、風花<sup>かざばな</sup>など降りはじめの雪を指す言葉もありますが、仏教では天の花<sup>てんか</sup>と書いて天花<sup>てんげ</sup>または天華<sup>てんげ</sup>と言ったりします。雪を天<sup>てん</sup>から降ってくる花に例えたものです。

また、雪山<sup>ゆきやま</sup>にスキーなどで遊びに行くこともあるでしょう。仏教では雪山<sup>ゆきやま</sup>というと、エベレストを最高峰とするヒマラヤのことを指します。ヒマラヤは“常に雪を貯えている山”という意味で、雪山（せっせん）と呼びます。

比喩<sup>ひゆてき</sup>的に使うことも多い「雪」という言葉ですが、『宝鏡三昧<sup>ほうきょうざんまい</sup>』という曹洞宗でお唱えをするお経があります。

その冒頭に、「銀椀<sup>ぎんわん</sup>（ぎんなん）に雪<sup>も</sup>を盛り、名月<sup>めいげつ</sup>に鷺<sup>ろ</sup>を隠<sup>かく</sup>す」という言葉が出てきます。

おさとりの世界は、銀<sup>ぎん</sup>のお椀<sup>わん</sup>に盛られた白い雪、名月<sup>めいげつ</sup>の皓<sup>こう</sup>々<sup>こう</sup>たるもとにその所在<sup>しらせき</sup>が分からない白鷺<sup>しらさぎ</sup>のようなもの。お互いの関係をこえた白一色の世界……。

確かに、銀色のお椀に雪を盛っても区別しにくく、また月明かりの下にいる白い鷺<sup>さぎ</sup>は見つけにくいことでしょう。しかし、それぞれ同じ色に見えるが同じ物でない、別の物でありながら同じ色をしている。そのものとして白である、という禅のおさとりの世界が表されています。

夜半から降った雪が、朝起きると一面の銀世界。新雪<sup>しんせつ</sup>の中に足跡を残すことに、子供の頃はとても嬉しかった記憶があります。大人になってからは、雪かきや後片付け、交通への影響を考えると、とても嬉しいこととは思えず、心<sup>こころ</sup>穏<sup>おだ</sup>やかに過ごすことが出来なくなってきました。同じ雪景色であっても年代や地域により違ったものに思えるのです。

禅のおさとりの境地<sup>きょうち</sup>とまではいきませんが、一月も早や四週目、雪見障子を開けて、外を眺めながら炬燵<sup>こたつ</sup>に入りミカンを食べる。雪が積もっている時くらいは、心穏やかにゆっくりと過ごしたいものです。